九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ヴォランティア的行為における”K”パターンについて：福祉社会学的例解の素描

鈴木，広

https://doi.org/10.15017/2328552

出版情報：哲學年報. 46, pp.13-32, 1987-02-28. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

ヴォランティア的行為における“K”パターンについて

—福祉社会学的例解の素描—

鈴木　広

Ⅰ　問題状況
Ⅱ　ヴォランティアという用語について
Ⅲ　行政への協力志向とヴォランティア行為
Ⅳ　Kパターンの抽出
Ⅴ　Kパターンの解釈に向けて

Ⅰ

「ヴォランティア」というコトバの意味内容をめぐって，とくに最近，福祉の領域で重要な論議がなされている。一言でいえば「ヴォランティア」とは何か，いかなるものであるべきか，いかなるものが排除されるべきか，とくに日本の現実に即して考えた場合にはどうか，といった問いかけがなされている。

この問いに対する答え方として，文字通りコトバのもともとの使われ方を明らかにし，それにもとづいて，いわばヴォランティアの理念を明らかにして，それを定義しようとする場合がある。もちろんその理念は，それを基準として，それに即して，現実に行動している多くの人びとの存在と意義に裏づけられており，その意味では単なるコトバの問題にとどまるわけではない。一つの現実の問題でもある。

しかし他方，ヴォランティアという片仮名を見てわかるように，これはコトバとしては英語であり外来語であり，一応，「奉仕活動」と訳せないことはな

いが，やはり完全な適訳とも思えない。だからこそ片仮名・横文字として現に多用されている。いいかえれば，まだ日本語として熟しておらず，やまと言葉のようにわれわれの身体的感覚次元にフィットしない，ヨソヨソしさが感じられる。

ところで高齢化社会の現実の要請のゆえに，ヴォランティア活動の広範な展開が期待される一方，また福祉の領域のなかに営利企業が続々と参入してくるようになり，あたかも学校教育の領域に塾や予備校が参入し，社会教育の領域に営利的なカルチュア・センター経営が参入してきたように，イメージの混乱がおこっているのが実情であろう。教育や社会教育や医療といった領域も営利の対象となるように，福祉も営利の対象となりうるし，現になっている。福祉社会としての高齢社会のイメージをえがこうとするとき，公と私のかかわり方，また私のなかでの企業性と私的集団（と私人）との異同の問題は，重要な論点をなすものである。

こうした問題背景のなかで，本稿では，ある意識調査のデータを利用して，「ヴォランティア」と片仮名で表現されている行動のもつ社会的特性のある側面（「二相性」または“K”パターンと，かりによんでおく）を解明し，それを通して，土着の日本社会と外来のヴォランティア像との関連ないし断絶のメカニズムを，多少とも考察できれば幸いであるが，主たるポイントは「二相性」の解明におくことにしよう。

II

そこでまず「ヴォランティア」というコトバの意味について，いくつかの辞書を利用して多少の詮索を試みよう。たまたま机上にある岩波英和大辞典では，voluntary については，形容詞の場合，①自由意志でされた，自発的な，強制されたのでない，②志願した，有志の，③自由意志で行動できる，……⑦〔法〕任意の，随意の，無償の，となっており，概念の中心にあるのは「自由意志」という要素である。語源的にも，ラテン語の volō は I wish（私は望む）であり，voluntās は自由意志を意味している。他方，volunteer という名詞は，

①志願者，②〔軍〕義勇兵，志願兵，③〔法〕任意行為者……，また動詞としては，③（……しようと）進んで〔自発的に〕申し出る，とある。ここでは志願兵という意味が中心におかれている。いずれにせよ「無償」という要素は表面にはほとんど見られず，「自発性」こそヴォランティアの核心である，と理解される。

念のため *Webster* の英英辞典を引いてみても，当然とはいえ，同じような解説である。voluntary は形容詞としては1として，「意志から，または自分自身による選択ないし完全な同意から生ずる行為，選択という行為，のなかで，あるいは，によって作り出された」とあり，8の法律用語として，「“valuable consideration”（契約の報酬として与えられる有価物）なしに，自分自身の自由意志から行動する，または為された。あることを為すべき当面の法的義務なしに，あるいは，当面の事態から付随的に生じてくるような義務なしに，行動すること，または為されること」などであり，その後者（8）に，再び「無償性」の要因が含まれているのを見るのみである。また volunteer という動詞は，「自発的に，すなわち要請や強制なしに提供，贈与する。要請や強制なしに，自由意志のサービスに参入し，または自分自身を提供する」となっている。ここでは懇請や強制なしの自由な選択ということが強調されている。部分的に無償の要素も現われているが，強調されているというわけではない。

ところで念のため *Encyclopaedia Britanica* を引いてみたが，volunteers という項の説明は「職業軍人ではない，平時において軍隊に一時的に編入される兵士に対する一般的な呼称」として，1757の軍事法以来，最近までの志願兵・義勇兵の歴史が記述されているだけで，それ以上のことは全く書かれていなかった。したがって『広辞苑』の「①義勇兵。②自ら進んで事業に参加する人」という解説は，簡潔ではあるがきわめて的確であるといえる。

このようにして，語の元来の意味は「自発性」に中心をおくものである。そしてその自発性とは，強制や対価の報酬などの，外的内的な影響力なしに，という意味にほかならない。いうまでもなく，その意味で定義された自発性の概念であっても，現実のあれこれの事例について，これは自発的か否かを判別す

ることは操作上甚だ困難であるのみでなく，原理的にも困難である。なぜなら，自発性ないし自由意志そのものが，個体内在的な諸要素と，外的環境的諸要素との相関々係の中でしか形成されえない以上，そしてとくに日本の場合についていわれるような「間人主義」的な風土・文化のもとでは，主観的にも客観的にも，自発＝自由と強制なり共同主観との境界はあいまいであるからである。これはコトバの問題とは別の，実態の問題である。本稿で考察してみたいと思うのは，主としてこの実態のレベルの問題であって，できればその上でコトバや理念・概念の問題にも立ち帰ってみたい。

ただし率直にいって本稿は，もともと問題提起的な性格のものである。ある調査の中でたまたま発見された一つの事実に端を発する簡単な推論であり，ヴォランティア論の全貌について提言しようとするものではない。それを考察する場合にも重要と思われる一つの視点を，試論的に示して，検討に供したいということである。最近の論議の一焦点とされている有償無償問題については，間接的にふれることになるであろうが，そのためには現在，別に本格的な調査研究を実施中であるので，詳しくはその結果をまって再考したい。

このように実態からのアプローチをとろうというとき，暫定的に，ヴォランティア行動の内容を，ヴォランティアというコトバを使わずに定義しておく必要がある。たまたま手元にあるものから引くと「ヴォランティアとは，上下関係で成立しているものではなく人間として平等な立場で，なにか困っている事，困っている人に対して，自発的に援助する全ての行為をさし，さらにそれらの行為が無償である」場合，という定義が見られた[1]。これは標準的なものであると思われる。この定義で，上下ではなくて平等という点は，戦時における強権的奉仕体制への反省を強調しているもので，それ自体，さきに指摘した「自発性」の問題に深くかかわるのであるが，「上下」は強権的奉仕に限るわけではないという異説もありえよう。それを別とすれば，「全ての行為」という点に多少の注釈が必要であろう。というのは，この定義に直接には示されていないが，すぐあとにつづけて指摘されてもいるように，行為の「継続性（および定期性・計画性）」という要件が，一般には重視されているからである。アド

・ホックな援助行動（席をゆずる，など）も，たしかにヴォランティア「的な」行為ではあるが，その種のものを含めて「全ての行為」とすると，ほとんどすべての人がヴォランティアである，ということになり，本稿の狙いとするヴォランティア的行動の特性分析のためには広すぎて適当でない。そこで「継続性」という要因をとり入れることによって限定を加えることにしたい。そして，定期性・計画性といった要素も，継続性のなかに包摂されるものと見做すことにしよう。すなわち，「自発性・援助性・無償性・継続性」がヴォランティア的行動の構成要素であると見る。その場合，「無償性」には大きな幅の内容が含まれうるので，その幅をさしあたり最大に考えておくことが望ましいであろう。すなわち *Webster* 辞典における “valuable consideration” の内容である。たとえば完全な無報酬（必要経費はもちろん，少なくともあらゆる物財的反対給付のない，そして時には心理的反対給付もない，等々のケース）か，必要経費（現物または金銭，ないしその両方）のみは許容されるか，有償とはいえ，法定の最低賃金以下のさまざまの水準の，物的または金銭的反対給付から，一定程度の賃金に相当する反対給付額にいたる……のどれか，というように。私たちが暫定的に想到した規定を，ワーディングの形にしたのは，結局，次のとおりである（昭和56年）[2]。

ひとり暮しの老人や身体の不自由な人など，手助けを必要とする人たちのお世話を，あるていど続けて，すること（職業以外に）

「職業以外に」という条件のなかに，一定程度の自発性と無償性が含まれる，と考えているわけである。ほぼ同じワーディングが2年後に総理府広報室の全国調査において使用されているから，私たちの定義も的外れではなかったのであろう[3]。もっとも直接的な対人サービス行為を主に想定したこの定義には，間接的な金銭の提供のような行為は含まれないという制約がある。しかしこの点については，データの分析の中でさらに関説していきたい。

Ⅲ

本稿で使用するデータは，昭和56年に実施した福岡県民意識調査で，その全貌は『生きがいの探求』として同年末に発表した。この調査のクェスチョネアには，メイン29問とフェイス9項が含まれる。その中に生活環境の現状評価や，その行政的改善への要求などをたずねる設問を入れるのは，われわれのコミュニティ・サーベイにおける公式のようなものであるが，それをたずねた後に，そのような要望を実現するために，「あなたの負担（税や労力や時間）が多少増えるとしても，協力してよい，と思いますか」という質問をおく。つまりは行政への協力姿勢を見る設問である。これに対する回答は次のとおりであった。

1.	よろこんで協力する	9.2%
2.	条件しだいでは協力する	65.1
3.	負担が増すのなら協力できない	14.2
4.	行政のすべきことなので協力しない	9.3
5.	不　明	2.2

すなわち協力的反応74%，拒否的反応24%であった（図1）。このような負担の形での行政協力の態度は，ヴォランティア的行動と一見したところ似ているように思われるが，実際にはどうだろうか。ちがうとすれば，どうちがうのか，を考えることによってヴォランティア的行動の性格を，よりはっきりさせることができる。実は，驚いたことに両者は全く別のものである。より正確にいえば，全くちがう側面をもっているのである。両者の相関係数は〔.038〕で，全く関係がない。

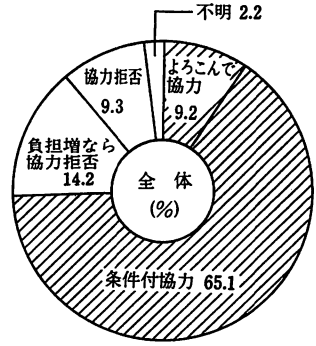

図1　行政協力

この行政協力態度と相関の強い変数を列挙してみると，その態度の特色が推察できる。

1.　人生の見通しは明るい　.186

2. 生きがいを感じている　.176
3. 年収が高い　.174
4. 人間関係に満足　.168
5. 帰属階層が上位　.166
6. 社会の仕組みは不可解　−.156
7. 対人関係で影響力をもつ　.154

などが〔.15〕以上の相関を示す項目である。これらに共通する要素は「階層性」ということであろう。3・5・7などは明らかにそうであり，そのほかの項目も，それらに一致する特性である。行政協力ではあっても，コミュニティ・レベルでの協力というものではないので，このリストにはコミュニティ・モラールを構成する項目や，人間関係の広がり（交際相手の数）や，参加団体の数といった，社会性要因が全くあらわれていない。したがって，この行政協力の態度は，コミュニティ意識と結びついた主体的志向ではなくて，「条件次第では……しないでもない」という形の，個人本位的な計算に立った態度である

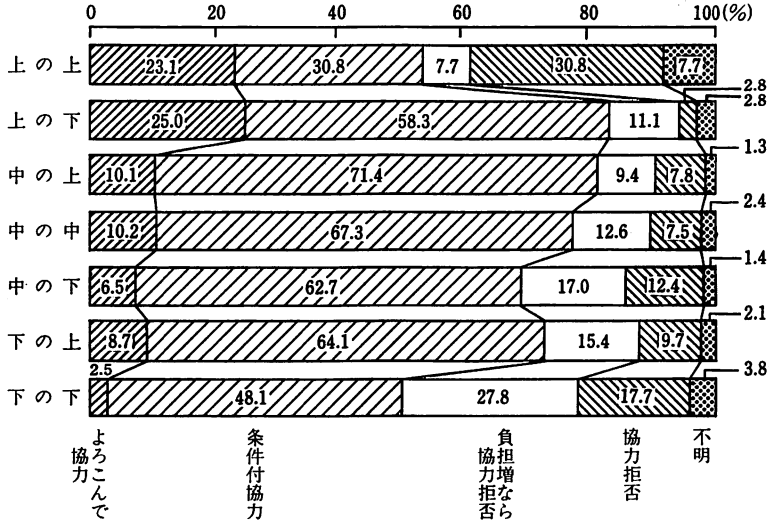

図2　帰属階層別行政協力の態度

と見られ，したがって「無償性・自発性・援助性」を核心とするヴォランティア的行動の「継続性」とは，なじまない異質の態度のように推察される。階層帰属意識との相関は〔.166〕であるが，これを図2に示しておこう。

これによれば上の上層において協力拒否の反応が強いが，この層の比重は，全標本中わずかに 0.6%にすぎないから，無視して差支えない。これを除けばほぼ正比例のグラフになる。したがって階層的に上位の意識をもつ人は，この意味での行政協力の態度を示しがちである，と一応はいえる。

また職業についていえば，管理職・自由業とか，官公庁の人や農林業など，学歴では高学歴の人びとほど協力志向的な傾向があるので，この協力態度は，たしかに中間層大衆のマジョリティの意見なのであろうと思われる。この態度には生きがい感との関連もあるので，個人本位的態度のなかから行政という公共性へ向けて，態度をキャナライズしていく方法を考えるさいの手掛かりを求めることができるかもしれない。とくに男が歳をとるにつれて協力志向的になっていくのに，女は逆に非協力的になっていくのは面白い。なぜそのような分化がでてくるのであろうか。ここから得られる想定としては，中間層＝個人本位的＝手段的志向としての「行政協力」という，タテマエ的ないし条件つき協力の姿勢（容易に現実には非協力に変わりうる，非協力と紙一重の協力，という自己詐術）が，男の生活構造（世帯主としての，タテ社会を生きる組織人としての，あるいは納税義務者，町内会の公的メンバー等々としての）にふさわしい反応なのであり，女の方はいわばヨコ社会に食い込んでいて，家庭内や近隣や脱組織の友人や，という要素の集合としての生活構造にふさわしく，素直に，詐術の媒介なしに，非協力の態度が累積される，という分化ではないか，と推定する。

いずれにしても「行政協力」態度の内実は，「条件次第では」税や労力や時間などの形の負担に応じる（応じない）こともある，というわけで，いつでも「拒否権」を留保した上での，協力表明であった。

そこで，より直接的に「ヴォランティア的行動」を抽出すべく，前節末尾に引いたような設問を用意したのである。これに対する回答の単純集計は（%），

1.	しばしばしている	3.2	14.6
2.	ときどきしている	11.4	
3.	ほとんどない	36.8	85.1
4.	一度もない	48.3	
5.	不　明	0.3	

となって，「ほとんど，一度も」ない人が85%にも達した。「行政協力」志向の者が全体の75%もあった事実と，一見してそりの合わない感じがする。そこでこの85%の人に，「それでは，これから援助をしてみたいと思いますか」と追求してみたところ，

1. すぐにもしてみたい　1.1%
2. 余裕ができたらしてみたい　30.6
3. してみたいが余裕がない　43.7
4. そういう気持はない　22.7
5. 不　明　1.8

となり，「前向き」の人は1.1%にとどまり，ほとんどが消極的・否定的な回答であった。これだと「行政協力」の75%に符合するような気がする。したがって結局のところ，全体の15%ていどの人が，少なくとも現に「ときどき」は，援助活動をしているわけで，85%は現にしていないし，当分，するらしくもない。余裕ができたらしてみたいという人は，多分，いつまでも余裕ができない人

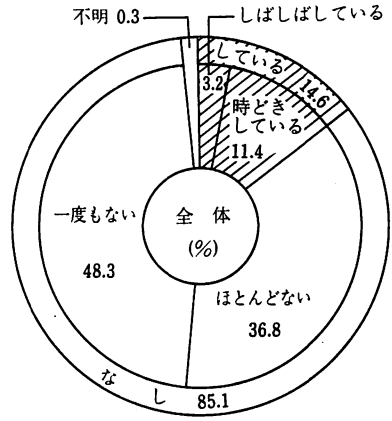

図3　ヴォランティア活動の経験

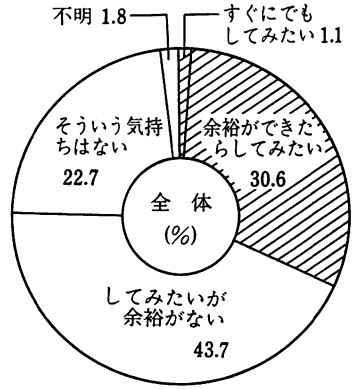

図4　ヴォランティア活動への参加意思

ではなかろうか。これはわれわれの日常の観察とも一致することである（図3，4）。

それではこの約15%の「ヴォランティア的」な行動者はどんな人びとであろうか。これを以下考察してみたい。

地域的には，八女・筑後の農村部に多く，また旧産炭地を含む田川・有明などにも多い。年齢的には高齢者ほど，この割合は高い。この点は性別をとわない。次のとおりである（%）。

	＜男性＞	＜女性＞
20～29歳	8.2	7.9
30～39	11.9	13.4
40～49	15.7	16.6
50～59	18.4	17.9
60歳以上	21.0	23.3

若い者は思いやりの心がないから低率なのだ，とは必ずしもいえない。若いので，そうした活動の機会に遭遇しないのだ，という客観条件にもよるであろう。というのは，ここにも機会の量は，かなりのところまで年齢というよりライフ・ステージの関数である，という関係がはたらいているであろうから。たとえば「しばしば」している人の割合は，男の20代が30代より多い。また，女の20・30代が40代より多いのである。いずれにしても，大勢として若年者が未経験的であることにかわりはない。

つぎにこの比率を職業別に比較してみる。比率の高い順に並べてみると，まず無職22.0%は高齢者ほど高率であったことに対応している。ついで学生19.2%は，若年者ほど低率ではあるが，「しばしばしている」者の割合はかえって高かったという事実に対応している。学生の「特異性」は記憶されてよい。農林漁業18.8%は，八女・筑後の高率につながる。以下，商工・サービスの自営16.7，パート主婦16.5，専業主婦15.6が平均より高率を示した部分であり，都市自営業なども，農林漁と同じく「家業」グループで，地域・親族「共同体」的な生活様式を維持していることが想定される。以下は，管理・自由業12.8，

労務職10.5，官公庁9.5，事務技術職9.1%など，純然たる都市型職業では，すべて低率を示す。つまりヴォランティア的行動様式は，都市的職業になじまない，「家」的行動（家業，主婦）にかかわる行動である，といってもよい。

IV

さて，ここでとくに注目する必要があると思うのは，ヴォランティア的行動と社会階層との関係である。まず帰属階層との関連をとり上げよう。「しばしば，ときどき，している」者の割合は，帰属階層のことなるにつれて，こう変化している。すなわち，階層の上下の両端でパーセンテージが高く，中央部で低い。とくに「上の上」で非常に多い。当然ではあるが，帰属階層と「ヴォランティア的行動」との相関係数は〔.059〕であって，事実上，無相関にほかならない。われわれの一方の想定としては「行政協力」のばあいにみられたと同じような方向の階層性が検出されるのではないか，少なくとも「ヴォランティア」というコトバを使った場合には，そうであろうと思われた。だが，実際の期待としてはその階層性は，「ヴォランティア」という用語をつかわなかったならば，現われないのではないか。すなわち，この片仮名の用語を使うことによって，現実・実態を歪曲することになっているかもしれない，という想定である。上記の事実発見からすると，この想定はきわめて的確であったといわざるをえない。これほど鮮明なKパターンの曲線が浮び上ってくるとは予想外であった。

上の上	38.5
上の下	16.7
中の上	15.9
中の中	13.1
中の下	14.2
下の上	19.5
下の下	20.3

単純に帰属階層と援助行動との相関係数をとってみると無相関になるのであるが，分布としては明らかに〔K〕型のカーブをなしている。これは数字の上では無相関だとしても，「いわば見かけ上の無相関」であって，実際には意味のある無相関である。ランダムな無秩序な分布ではなく，K型という明確なパターンを示しているからである。

なぜか。われわれの解釈としては，このKパターンは，Vパターンつまり階層性パターンと，Λパターンつまり逆階層性パターンとが，合成されて現われる複合パターンであろうと考える。Vパターンというのは，たとえばロータリークラブ，ライオンズクラブ，ソロプチミスト，大学のサークルといった，階層上位性に傾斜した，そしておそらくは“volunteer”という横文字・片仮名にふさわしい一種の「開明性」をもつ活動部分にほかならない。

それに対してΛパターンは，設問の中に「ヴォランティア」という特殊用語を使わなかったがゆえに現われてきた，下層に傾斜した庶民的な福祉性行為であって，いわば昔から伝統的になされてきた，ないし自然発生的な相互扶助の慣行の堆積をあらわしている。

年収でみても，100万円未満層が23.2%，100～200万円未満層で19.4%と，福祉行動は低収入層に多く，中間層の関与は全体の平均よりも少ない。逆に，700万円以上層でも17.1%，800万円以上層も14.9%と，平均以上の比率になる。

ここには明らかに階層的な二相性（Kパターン）が認められる。すなわちヴォランティア「的」活動は，二つの部分，二つの系統によって担われていることがわかる。この発見について，確認のためになお二三の論点を追求してみよう。

階層性の指標として，帰属意識や職業や収入をあげるのはごく普通であるが，さらに学歴をとり上げてみる。するとヴォランティア「的」行動を，「しばしば，ときどき」している割合は，大学卒で14.6%，高校卒で12.8%，中学校卒で19.2%となっており，ここにもKパターンがあらわれている。「しばしば」のみをとり出しても，4.1，2.9，3.3であって，階層的二相性は顕著である。職業・収入・学歴は，いわば「客観的」因子であるが，たとえば「対人的影響力」のような要因についても，同じようにKパターンが認められるのである。

「いろいろな場合に，あなたはひとから意見や助言を求められることが多い方ですか，それともひとの助言や意見を求めることが多い方ですか」という質問によって，影響力の流れ，ネットワークの中での対象者の位置がわかる。これも一種の社交的階層性である。経済的階層ではなくて，文字どおりの社会的

階層性である。

1.	人から求められる方	24.4
2.	どちらかといえば求められる方	13.8
3.	どちらも同じくらい	16.9
4.	どちらかといえば求める方	11.0
5.	人に助言を求める方	16.0
6.	どちらも無い	6.5

3の中間的位置の人に割合が多いのは，「社会」的階層の特性かもしれないが，とにかく1と5の両端では，たしかに割合が多い。影響力の階層は経済的階層とちがって，純個人的要因も入ってくるし，「影響」しあう場面も特定化されていないので，ややパターンがあいまいになったものであろう。

次に純然たる「態度」要因との関連をとり出してみよう。「生活の総合満足度」の大小と，ヴォランティア「的」行動関与との関係をみる。

		＜しばしば＞	＜ときどき＞	計
1.	満足層	3.1	15.1	18.2
2.	やや満足層	2.8	10.8	13.6
3.	やや不満足層	4.8	10.0	14.8
4.	不満層	7.1	10.7	17.8

「しばしば」だけをみると，むしろ不満足層のほうに，ヴォランティア「的」行動にコミットしている人が多いという事実は，意外といってもよく，興味ぶかい。それにくらべると，「ときどき」するのは，「満足」グループで最も多い。＜しばしば＞グループはΛ型であり，＜ときどき＞グループはV型であり，それらが合成されて，Kパターンつまり階層的二相性が現われてくるのは，「合計」の数字を見て理解できる。

態度要因との関連をさらに考察しよう。「生きがい感」の強さは，人の生活態度の総括ともいうべきものとして注目されるが，図5に示したような関連である。全体としては生きがい感の強い者ほど，この活動にコミットしている傾向ではあるが，＜しばしば＞層は「あまり感じていない」人びとの間にもかな

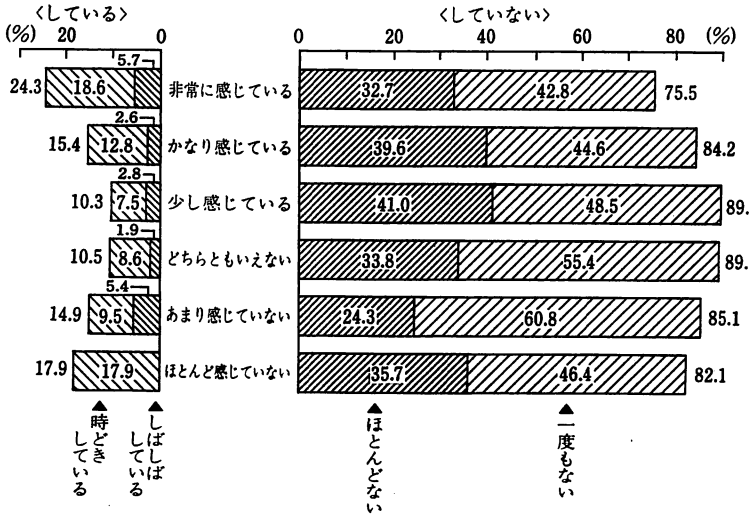

図5　生きがい感別にみたヴォランティア活動の経験

り見られるし，<している>者の合計は，やはり生きがい感の強い者と弱い者との両方で多くなっていて，「少し」とか「どちらともいえない」というあたりで最も少なくなっている。明らかにここでもKパターンが読みとれるのである。反対に<していない>者の分布は，Dパターンになっている。やや奇異ではあるが，生きがい感は帰属階層との相関はそう高くない。もっとも〔.16〕ていどはあるから，生きがいが一定程度の階層性であることは否定できない。とはいえ，その態度レベルで，依然としてKパターンが貫徹してくる。これは「あなたは，いま，毎日の生活に，“気持ちのハリ”や“生きがい”を感じていますか」という質問である。

念のため，「生きがいの総合スコア」というものを構成して，それとの相関をみることにした。これは，人の生きがいを構成している要因・領域として，いろいろな検討のなかから，次のような7分野をまず抽出する。

1. 人間関係の維持
2. 私生活の安定

3. 自分を生かすこと
4. 人生の意味（理想など）の確認
5. 未来への展望
6. 自由があること
7. 生活に変化があること

これら7分野の，生活における重要度と，自分の7分野ごとの満足度・充足度とを求め，それらを合成して，生きがいの総合スコアを合成的に算出する手続きをとったのである。このスコアと，さきにみた「生きがい感」との相関は〔.354〕と，当然ながら，きわめて高い。とはいえ，上の7分野に示したように，階層の経済レベルとは一応無関係に，社会的主体的に，文字どおり「総合的」に構成したものであるが，これとの相関は表1のように，これまたきわめて興味ぶかいものであった。第1に，最高スコア・グループの活動は，全部<ときどき>層であること，第2に，むしろスコアの次位のグループが，<しばしば>層を最も多く含むこと，第3に「小計」をみると，ここでもKパターンが再現していることなどが指摘される。この総合スコアと帰属階層との相関は〔.232〕で，単純な生きがい感よりも階層性は強い。だからKパターンは再現しても不思議ではないとしても，この場合には，Kパターンを構成するV要素の方がΛ要素よりも，やや強く貫徹しているように思われる。それは総合スコアが階層にくらべて，より直接に，人の生き方・態度・方針に結びついた特性だからであろう。にもかかわらず，依然としてΛ要素が消えることはないの

表 1 生きがいの総合スコアでみたヴォランティア的活動の経験（%）

	総合スコア	しばしば	時どき	小計
高↑	112 ～ 90 点	——	30.0	30.0
	89 ～ 70 点	9.7	13.7	22.4
	69 ～ 50 点	2.6	12.0	14.6
	49 ～ 30 点	2.1	9.6	11.7
↓低	29 ～ 7 点	1.0	16.2	17.2

である。

さいごに，いわば生きがいの逆数ともいえるアノミー・スコアとの関連を検討して，だめ押しを試みよう。表2がそのデータである。

表 2 アノミー・スコアからみたヴォランティア活動の経験

	アノミー・スコア	しばしば	時どき	小計
高	24 ～ 21 点	5.2	14.8	20.0
↑	20 ～ 17 点	2.8	10.3	13.1
	16 ～ 13 点	2.4	11.1	13.5
↓ 低	12 ～ 6 点	1.9	10.0	11.9

いうまでもなくアノミー・スコアは，「無規範」性意識の強さであるが，具体的には，世界や人生ないし自分の存在についての，「無意味さ」，「孤独さ」，「人への不信」，「社会への拒否反応」，「社会の不可解さの意識」などから，合成したものである。スコアが大きいほど，アノミー意識が強い，ということである。スコアを高低にしたがい4区分して，ヴォランティア「的」活動経験の有無を検出してみると，＜しばしば＞経験についても，＜ときどき＞経験についても，大体においてアノミー的意識を強くもっている人ほど，ヴォランティア「的」経験がある，という形になっている。これはKパターンではない。しかし最もアノミー的な人が，最もヴォランティア的であるという事実は，それだけで甚だ示唆的である。アノミー的な意識は多くの場合，低位階層性と結びつく。とすれば，低位階層におけるヴォランティア「的」風土を傍証するものとして，このデータを読むこともできよう。

V

以上のような簡単な分析から，一応の暫定的結論として提起したいことの第1は，“volunteer”という用語が，日本でどう受け入れられているか，について配慮すべきではないかということである。“volunteer”に限らず，社会福祉

の領域で多用される用語には，横文字そのままのナマの形が非常に多く，しかもそれを一部専門家の間で通用する専門用語としてだけではなく，一般住民の間にもそのまま通用させようという方向になっているように思われる。“community”などとならんで，“volunteer”は一般にも頻用されて，かなり流通するようになってきたが，ノーマライゼイション，クライエント，デイ・ケア，ショート・ステイ，グループ・ワークなど，専門人にしかわからない用語が多い。医者がカルテ（もその一つ）にドイツ語で記入するような，「知らしむべからず」的な権威主義的な「施策」，「施療」的な，あるいは慈善事業的な感覚を，これらの用語の使用の中に感じとることができる。いずれにしても医者と患者，ワーカーとクライエントとが，人間として対等ではないし，対等であるべきではないという暗黙の前提を，部外者やクライエントの方は感じるであろう。この問題は興味ある点ではあるが，別に調査研究の機会もありそうなので，とどめておきたい。

ところでつぎに，本稿で明らかになった，ヴォランティア「的」行動にみられるKパターン，つまり階層的二相性は何を意味するのか，が問われる。われわれはKパターンという事実を発見したが，その意味を解明する作業に本格的には着手していない。本稿でのべた若干の分析から，以下のことを仮説的に提起したい。

Kパターンの成立は，VパターンとΛパターンとの合成によるものである。とすれば，Vパターンのほうは学歴・収入・階層の「高さ」に比例するヴォランティア「的」行動部分であり，これこそ，「的」を付ける必要のない，片仮名ないし横文字の使用に適合する部分，やや極端な表現をすれば，エリート的，キリスト教的，輸入的，理念本位的，倫理主義的，無償・奉仕的なヴォランティア活動部分ではなかろうか。金銭・営利・利潤というものが歴史の中で社会的承認を獲得してくる過程を検討してみると，この部分の意味が推察される。西洋の場合であればキリスト教史の中での「営利」活動の社会的承認過程，その中核には『プロテスタント倫理と資本主義の精神』が位置しているが，そして日本の場合であれば武士的な儒教倫理と営利活動との社会的「調整」の歴史

過程ということになるが，この過程と複雑に絡み合って，ヴォランティア的活動の形成・変容は展開しているであろう。こうした社会史的過程の解明は，「福祉」現象の社会学的構造を解明する作業の一つの中心部分ともなるであろう。

KパターンのうちのΛパターン（下層的要因）についていえば，一つには村落社会の共同体的構成（具体的には親族・近隣・友人・その他の伝統的な人間関係の構造的機能的な重要性として存在する）にもとづく，伝統的，慣習的行為としての援助であり，また都市社会の土着的部分や家経営的部分，あるいはかつての旧炭住社会や[4]，社宅などの共同体的要素をもつ部分ないし，なんらかの社会的「共通」性を分有する居住地区（ある種の団地など）にさまざまの程度に伝統的ないし自然に見られる，相互援助的な慣行であり，またとくに，「遠い親類より近くの他人」が事実において妥当することの多い都市下層社会の最少限の相互保障機構などであろう[5]。これらについて本稿で事実データを示すだけの紙数がないのは残念だが，いわば当然のことであろう。今後注意してほしいことの一つは，Λパターン部分の日常的援助活動の大部分は，もし「それはヴォランティア活動ですか」と尋ねたならば，「いや，ちがいます」と答えるか，さもなければ「さあ，どんなもんでしょうか，ようわかりませんが……」と答えるのではないか，ということである。これは私の仮説である。Kパターンは質問の中に「ヴォランティア」という語を使用しなかったから出現したのではないか。もしこの語を使用していたならばVパターンか，それに近いものが抽出される結果になったのではないか，ということである。

さらにいくらか言い過ぎになるかもしれないが，この仮説からの推論として，次のような想定も検討の余地があるのではないかと思う。Vパターンにとってはヴォランティア行為の「無償性」が基本的な意義をもつ。なぜなら，(1) キリスト教的系譜の中でのヴォランティア活動であれば，物質的には無償であるが，その行為は神に嘉せられるという，最高の，何ものにもかえがたい有償性をもつであろう。それ以上に有償を求めるなどということは，あるべからざる非道な行為となる。(2) 貴族や教会や修道院，そしてやがては富者や有力者，日本でも寺院・貴族・大名・有力武士や上層町人・地主など，すでに現世で神

や運命や前世の報酬に恵まれている者が，たまたま恵まれていない者に対して，「無償」で施しをするのは，その場面では無償とはいえ，すでに別の形で有償なのである，ということ。だからこそ，その行為は全く無償でなければならないのである。無償であっても，世間からの有形・無形の「報酬」は充分に期待され，上位者に対する下層のルサンチマンも少しは緩和される（それも心理的・社会的有償の要素である）だろう。Vパターンには基本的にこの「上下性」がひそんでいるように思われる。

Λパターンの支持部分にとって有償・無償の論はどんな意味をもつか。ここでは基本的に，この種の行為は「互酬性」(reciprocity) の上に成り立っている。その点で，Vパターン部分とは全く異なる。理念型的にいえば，このΛパターン部分において，世界はフラットなゲマインシャフトをなしている。これを「義理」といいかえてもよい。ある高僧は「衆生の恩」ともいった。これは仏ではあるかもしれないが，神ではなく，つまりは世間である。有償ということが意図された利益・利潤を意味するなら，世間の義理の範疇のなかでは，有償への拒否反応がむしろ普通であろう。しかし「受けた好意」に対してふさわしい仕方で「義理をはたす」ことは，外にあらわれた形としては有償と同じ結果になるかもしれないが，それとは内面的に全く異なる質の，つまり，むしろ当然のこととして期待し期待される「互酬」の範疇内の問題である。そこでは有償・無償の識別の論理は通用しない。このような伝統的な互酬性規範にもとづいて実行されているΛパターンの援助活動は，「ヴォランティア」と呼ぶのがためらわれる行為であるので，ヴォランティア「的」活動とよんできたが，このΛパターンの世界に対しても，Vパターン固有の原理たる「無償」性を，一様に強制的に主張し貫徹しようとすると，かえってΛパターンの互酬性世界を破壊する結果となるかもしれない。それは結局のところ，ヴォランティア的世界そのものを狭小なものとし，そこに文字通りに有償の，企業による営利活動としての福祉資本主義経営の分野とエートスとを，拡大滲透させる機能をはたすものとなる。そのような関連を，つきとめ解明して，望ましい最適解をひき出していきたい，と考えている。付言すれば，さきにふれた「行政協力」志向と，この

K型援助行為とのちがい，すなわち前者はほぼVパターンを示していたという事実の意味が，ここで多少とも理解していただけたであろう。

さいごに，「福祉」という社会活動の領域を，社会の機能として把握するところから，福祉社会学の論理が展開されるが，本稿では，その一例解という意味において，「ヴォランティア」行為をとり上げ，それをめぐる社会学的問題状況の一端にふれたにすぎない。

註

（1） 潮谷愛一：「障害者福祉とボランティア」，児島・清原編『身体障害者福祉教室』176頁。

（2） 鈴木広ほか：『生きがいの探求（昭和56年実施）』福岡県。

（3） 「ボランティア活動に関する世論調査」（昭和59年9月実施）『世論調査』昭和59年1月号。

（4） 三浦典子：『炭住の人と社会』山口大学社会学研究室刊。

（5） M. Axelrod: Urban Structure and Social Participation, 1956, 鈴木広訳編『都市化の社会学』所収。

※ 明日スウェーデンに向けて出発という日に，どうやらここまで書いたが，十分に整理できないまま，提出してしまうことになった。さらに後日の再検討を期したい。（1986. 10. 31）